

【7】 考察と今後の課題

今年度は、研究の最終年次ということで、研究主題となった「からだづくり」についても、初年次の「運動を楽しむ」というにとどまらず、「すすんで、生き生きとからだを動かす」という、主体的・活動的な取り組みに重点を移し定着させてきた。

それは、教師主導でなく、生徒自らが積極的に自らのからだに働きかけることが、青年期にさしかかった人格の形成にとっても不可欠であると考えた点による。

また、研究課題とはかかわりなく、高等部の生徒にとっては、社会参加にあたっての諸課題をも同時にクリアしなければならなかった。幸い本校では、進路指導主事の長年にわたる献身的な努力もあって100余におよぶ事業所・作業所が開拓されていることもあり、実習等の取り組みを容易にしてきた現状はあった。

この社会参加への課題と研究課題を矛盾することなく調和させて、生徒一人ひとりの発達と成長を期し、スムーズに企業就労をはじめとする社会参加を達成することに努力した4年間であったように思う。こうした努力もあって、研究課題の「からだづくり」が基盤となって、自信をもって社会参加しようとする生徒が輩出していることに、この4年間の高等部の研究活動の成果を集約できるように思う。

(1) 運動場面における変容から

身辺処理もまよならない生徒を含めて、高等部の教育目標である「社会的自立」まで高めていくことは至難のことである。しかし、社会的自立に求められるメンタルな面での成長も、基本的にはそれをささえる強固な身体をつくりあげることにより可能となると考えてきた。

そのため研究の初期（1・2年次）においては、しっかりと運動を楽しませ、運動量をできるかぎり確保できるように工夫してきた。その結果、生徒たちは、運動のもつ楽しさに夢中になり、汗を流して運動に取り組むようになった。特に、保健体育の授業でのバスケット・サッカーなどのボールゲームについては、昼休憩の時間に教師をさそってゲームに熱中するまでに発展していった。

しかも、こうした生徒自らの主体的な取り組みは、単に運動面での活動にとどまらず、児童・生徒会活動という自治的な活動を活発にしようという気運を生みだし、「たなばた集会」や「クリスマス集会」を生徒たちの手で組織化した点は注目される。

また、本校独自の取り組みとなった「からだづくり養訓」（高等部では朝の活動としての課題別養訓・10分間走）では、一人ひとりの課題を細かく分析し、グループ編成にも工夫した取り組みとしてきた。その結果、それぞれの課題をクリアしはじめただけでなく、全体的にみても、走力・持久力、筋力などの面で大きな前進がみられるようになった。

格別、4年間継続してきた10分間走は、個別目標（めあて）の達成にむかって生徒一人ひとりが主体的に努力し、自分のめあてを越えて、他との競争を意識して意欲的に取り組むまでに発展し、長距離走を、本校の得意種目にまで高めた。また、社会参加にあたって、生徒たちが、生涯スポーツとして取り組むことができるように、ボールゲームやなわとび等に創造的な研究がなされたことも大きな成果となった。

(2) 生活場面における変容から

生活場面でのからだづくりは、精神的な力強さとか、意欲的な意志の形成などをねらいとしてきた。また、さまざまな事象に対しての認知する力や、その力をベースとしての表現する力を培うことを目標としてきた。

近年、本校の生徒の実態は重度、多様化の方向をたどってきている。しかし、どんなに重度な生徒にとっても、生きて働く力の根底には、このようなメンタルな力の養成が不可欠なものと考えてきた。そのため、職業科や生活一般の学習においては、格別これらの目標にむかって、それぞれの生徒の課題をしっかりと見きわめた学習集団を編成し、今もっている力や能力を、学習の単位時間に最大限に発揮できるような配慮と学習環境の設定に努めてきた。

すなわち、学習時間いっぱい活動しきること、自らの課題達成にむかってがんばれる意欲的な取り組みを期待したのである。

その結果、運動場面で培った体力を基礎に、高等部の教育目標としてきた社会的自立にむかって大きく成長している生徒の姿を多く見ることができるようになった。

特に、職業科の学習の中でも、現実の社会に直接ふれることになる現場実習で、学校で培った力を最大限に発揮して、社会（事業所など）から大きな評価を得てきている生徒がみられるようになったことは我々の喜びでもある。まだまだ、きびしい社会の風にあたじろぐ生徒も多いが、この「からだづくり」で培った力が、社会参加にあたって自信をもって立ちむかっていけるだけの展望がもてたことが、この4年間の大きな成果である。

(3) 今後の課題と青年期教育への展望

4年間の研究の取り組みによって生徒の変容にも顕著な成果をみることができた。しかし、本校のいまひとつの任務でもある教育実習が教育課程を着実にすすめる上で支障となることもあった。また課題別の学習集団の編成に苦心してきたが、高等部になってから本校に入学してきた生徒との発達段階のちがいがあまりにも大きく、一人ひとりの課題に応えた学習の展開にかなりの工夫を必要とした。高等部の実践は、全国的にも歴史が浅く、模索の状況にあると聞く。

しかし、青年期にさしかかった高等部の生徒が、その人格的自立にむかって、さまざまな特性を発揮して着実に社会参加の課題をクリアーしている姿をみると、この時期の発達の伸びの著しさを我々は決して無為にしてはならないと考えるのである。

青年期の生徒たちは、急速に「認識する力」「思考する力」「表現する力」などを発揮して教師たちを驚かす。4年間の「からだづくり」を通しての取り組みは、小・中学部での綿密な指導計画と実践の上に、青年期の発達的特徴をしっかりとふまえた系統的な実践によっては、その発達や成長にとって大きな成果を上げうることを立証したと思う。

青年期の教育は、大人にむかう重要な時期の取り組みであり、生涯を豊かにおくための基盤づくりとなる。「たかが3年」といわれた高等部教育から「されど3年」といえる実践を重ねていきたい。